

# 英語教育考

## —— 小学校英語導入で局面打開を ——

教養教育 林 彦一

アブストラクト：「実際の役に立たない英語」という言葉が、昔から言われ続けながらこれという妙薬もなく今日まで続いている。そしていよいよ本丸、つまり小学校に英語という事態に直面したのだが、筆者は、著名人の賛否両論を具に考究、これを以て単に英語のみならず、教育全体からこれからの日本を視野に収めた立論を試みた。

キーワード：音としての言葉、日常性に立脚した教育、遊びから教育へ、下位上達の教育、惹きつける教育

### はしがき

先ず、こういうものを書くに到った経緯から。それは小学校の英語教育導入をめぐるの、『朝日新聞』（8月27日付）と『毎日新聞』（30日付）掲載の二つの記事であった。本来は中学（高校・大学）英語を改善しよう、というのがまともな考え方、しかし戦後何十年、相変わらずの状態なのでそれは差し置いて、次善の策（？）として浮上してきた案・考えである、くらいに私は軽く考えていたのだが、大々的に取り上げられた賛否両論と錚々たる論者の顔ぶれ\*、を見て驚いた。そこで私も本気で考える気になり、いくつかの書物にも目を通し\*\*、本稿のようなタイトルのもと、匹夫ながら私も50年の中・高・大の英語教育経験者として（その他、人間性とか教養というものにも非常に関心がある者として）、参画する余地があると感じたのである。

\*『朝日』の「オピニオン」面、「三者三論」という見出しのもと、賛成論者二人（専攻は国際社会学。前東京外国大学学長、中央教育審議会委員の国際教養大学長・中嶋嶺雄氏とタレントのセイン・カミュ氏）と、反対論者一人（専門は言語の認知科学。言語科学界会

長、日本英語学会理事で、慶応大言語文化研究所教授の大津由紀雄氏）の意見の開陳があり、これとは逆に——だからと言って、これを以て『朝日』は賛成派に肩入れ、『毎日』は反対派と言うことは出来ないだろうが——、『毎日』の「主張・提言・討論の広場」は、賛成論者一人（カリキュラム研究、英語教育の専門家で中央教育審議会専門委員の岐阜大教授・松川禮子氏）と反対論者二人（大津由紀雄氏と精神科医の和田秀樹氏）というおもしろい取り上げ方をしている。

\*\*新聞記事では、大津由紀雄氏だけが、『朝・毎』両紙に反対論者として顔を出されているので他に反対論者はそう多くないのかと思っていたのだが、なんのなんの、新聞でのもう一人の反対論者たる和田秀樹氏に匹敵する有名人が、軒並みに（と云っていいほど）反対論信奉者であった。

Cf. 「中央新書ラクレ」として出ている一連の英語物（市川力『英語を子どもに教えるな』、斉藤孝・斉藤兆史『日本語力と英語力』、茂木弘道『文科省が英語を壊す』、和田秀樹『「英語脳」のつくり方』。その他、アプリコットから出ている、松川禮子氏の『明日の小学校英語教育を拓く』『小学校に英語がやってきた！』、鄭 讃容『英語は絶対、勉強するな！』（サンマーク出版）等。

### （一）総論

さて、今さら私が喋喋するまでもなく、昨今の大学生の学力は目に余るものがある。これは、私

の目には「文化」と「自然」の問題と映り、文化人たる教師が、教化（cultivated, cultured）されていない、粗野な（wild, boorish, unpolished, unrefined, crude, rough, coarse, vulgar, rustic, impolite）自然人と向き合っている構図に見えるのだが、だからといってどちらがいい悪いかとは云えなくて、謂わばどちらも時代の犠牲者、話はそれるかもしれないが、昨今やかましいクマの出没と同じような問題に還元されるように思われる（イスラムとアメリカもこの範疇に入るのかどうか？）。結局は、「豊かな社会の（精神）病理」に行き着くので、文明的・物質的な面だけに心を奪われ——物は豊かで情報過多、その応接に違がなくなるのは当然と言える——、精神的な面で文化に親しむことが難しくなり、限りなく物質文明に毒されていく。となるとその影響をもちに受けている学生（若者）が悪いことになるが、物質的に満ち足りた若者に精神的な物を求めるとするのは、一部のすぐれた者ならいざ知らず、要求過剰とも云える。加えて子供は本質的に遊び好き、その遊びも昔のように体全体を使っただけの遊びがなくなったとあっては\*、子供（若者）の受難の時代と云える——教師はまだ飢餓の状況が残っていた、文明の上昇期に若い時代を送ったので、精神的なものを求めざるを得なかった（求め易かった）——。

さてこういう状況の中、私は、事もあろうに「英語」というもので突破口を開きたいし、開けると思っているのである。教えている学生の多くは恐ろしいほど語学力がない。にもかかわらず、そういう学生をみても彼らを責める気にはならず、中・高の英語教育の方法（教え方）が間違っている——これは私だけの思いではなく既に昔から多くの識者が指摘してきていながら、どうにもならなかった問題だ。尚、蛇足ながら、英語の‘wrong’は「悪い」「間違っている」双方の意味があって便利な語だ、ということを書いておこう——、と見ている。しかし、だからと

て教師をせめても仕方がないので——彼らだけの責任ではない、彼らに資格を与えたのは大学（教育）だから——、恐らく全体責任或いは時代の問題になるのだろうが、そんなこと云っても詮ないので、学生を教えていつも痛感する、これでは学生が可哀そう、彼らは（も？）犠牲者だ、という複雑というか屈折した思いが、私にとって全てである\*\*。

ということで、大学の他の教科の先生方がどのように学力低下・勉強意欲の欠如を感じ・捉えておられるかはこの際どうでもいい。というのも、私は「英語」はいろんな意味で特別だと思っているからだ。それは、授業面で先ず少人数、次に質問や指名で、クラスと一対一のコミュニケーションが取り易いということ。次に、言うまでもなく英語は言葉である。言葉は日本語が好き嫌いと別々にみんな使っているように、例え外国語であっても、言葉に変わりはない、というのが私の考えである。ということは、教え方さえ間違えなければ、中学校程度の英語までは、誰でもできるようになる、ということだ。いやハッキリ云えば、中学の英語で英語がそこそこ喋れるようになり、英検準二級程度の実力はつくはずだ、という考えの持ち主で私はある。

このことは、英語のスタートは勉強（頭脳・知能）でなくスポーツ（トレーニング）である\*\*\*、ということにも関連してくる問題である。これは私だけでなく他の、小学校英語導入反対者でも同意見の人\*\*\*\*があるくらいだから、安心？出来る考えと云えるだろうが、スポーツは教育者というより指導者が教えたことを、自分で何度も実際に繰り返さねば上達しない。ところが繰り返しは単調で変化がないので飽きてくるし——遊びたい盛りの年頃は特にそうである——、上達はなかなか目に見えないだけでなく、上達したと思っても錯覚だったということがよくある（その代わり、突如、開眼することもある）。こういう過程を首尾よく通過するのに不可欠なものは、本人のやる

気と少しずつの上達を楽しむ気持ちだが、こういう人間を作るのが英語教師の腕にかかってくるということになる。端的に言えば、かの國弘正雄氏が、会話の達人になられたのは中学時代のある英語の先生の教え（朗読）をきっちり実行したからと言われているが、勉強嫌いな子どもに、これに類することを行わせる人間的或いは技術的な力を教師が持っているか、だけの問題になる。

と云えば、そういう「人間的或いは技術的な力」を、教師の資質の問題として、とんでもないものに反対論者は取られるであろうが、これについては、全科目を教え生徒の生活レベルに密着している小学校教師は、一人ひとりに（人間を慈しむ）気持ちから接することができさえすれば、それが「人間的」ということなので格別目くじらを立てることはないし、技術面は、英語というスポーツは「競技」というより運動——‘sport’には、「娯楽」「楽しみ」「気晴らし」といった意味もある——、教師の大した技術は要らないのである。とは言ってみたものの、この背後には、「教える」でなく「勉強は生徒が自分でするもの」という思想がある。つまり、教師に人間的な魅力があれば、生徒は進んで躓いてくるということ。とすると、教師と生徒の人間性というか人間としての在り方というのが、問われてくる。そして、この点で、世の知識人と私が最も見解・感懐を異にする事\*\*\*\*があるようなので、気が進まぬながらも、もう少し書き進めることにする。

私は先に、「こと英語に関しては、そういう学生を見ても彼らを責める気にはならず」「学生が可哀そう、彼らは犠牲者だ」などと云ったが、実は、「英語」に関係なく、彼（女）らの人間性——たぶん彼（女）らを幼稚で大人になっていないと見ている大人が大半だろうが——、が好きなのである。（多くの人は学生をでき損ないと見ておられるようだから）でき損ないが好きなのだ、と云ってもいいかもしれない——もちろん「できる」学生も好きである——。これはたぶん、私自身

が自分を、一面ではいつまで経っても子供っぽい、でき損ないの人間と見ているからであろう。こういう私にとって、大学生も小学生も大して変わりはないので、私は私の学生を子ども扱い（これから一人前になる人間扱い）しているし\*\*\*\*\*、私自身も子どものような気分で彼らに接しているようなのだ。私がそういう人間だから小学校英語導入賛成という考えに到ったとも云えるようで、このことは逆に云うと、反対論は大人の立場から、人間として出来上がった人の立場からの意見になる、ということだ。従って反対論者に限らず、賛成論者にも、子ども大人の私と相容れない場合もあるということになる。

最後に、導入といっても、私は「音声」としての英語しか考えていないということ、それからタイトルの「局面打開を」で、英語教育ができるようになることで、全学科を教えるという特徴を生かして、横つまり他学科の勉強にまで拡大、縦の面では「初めが」ということで中・高・大まで影響を与える、という壮大な？事を睨んでいる、ということを書いておく。

\* 子どもの体力低下を憂えて、『毎日新聞』の編集委員・玉置通夫氏が、特別に「小学校に体育教師を」置くことを提言されている。（10月17日付「西論風発」）

\*\* 如何に学生が犠牲者になっているか、彼らの痛ましい生の声として、以下に私が教えているある優秀な学生の——それは文章から見ても分かるだろうが——感想書きを示す。これは一例だが決して例外ではなく、殆ど全員の代弁であることを断っておく。尚、この私の気持ちは、本文のクマの例で云えば、日本ツキノワグマ研究所理事長・米田一彦氏の「銃で撃たれた瞬間、大地に広がる自分の血をなめ、命を取り戻そうとするクマたちの悲しげな目を私は忘れることができない」（「クマの被害」、『毎日新聞』、11月8日付）に準えることができるかもしれない。そしてこの気持ちは、来年の退職後は、樟蔭の、いや樟蔭に限らず中学生を教えて、英語の面のみならず——というのは生徒は英語を通して、自分で勉強できる仕方を身につけるといことだが——、高校・大学のお荷物にならない生徒を育ててみたい、そのためにこれから動いてみよう、とい

た方向に私を駆り立てている。

-----

林先生の講義を受けて、様々な事を学ぶ事ができました。それは英語のみならず、人間性であったり、生き様であったり、国語であったりと本当に多種多様な事を吸収できる、私にとってはとても充実した講義でした。

これまで私は英語を能動的にではなく学ばなければならぬ、言わば学ぶ事を強要させられたものとしか捉えていなかった様な気がします。しかし林先生の講義を受けるようになってからは、真剣に学びたい、習得したい英語に変わりました。この事は恐らくもっと以前から、それこそ英語を学ぶようになってから感じていた事かもしれませんが、林先生の講義で改めて強くその事を感じる様になったのだと思います。私の中での一番の変化は、英単語がおもしろいと感じる様になった事です。(中略)この時初めて「英語ってこんなに面白い発見があるんだ」と心の底からそう感じました。それからは辞書を引く事が楽しくなり、自然と英単語も頭に入ってくる様になったのです。今までの私の英語に対する意識が、一気に覆された気がしました。

先生の関連付けは本当に見事で、正直に言うところまで話が広がるのだろうかかと心配になった事さえありました。しかしこの勉強法は今までの私には全くなかったもので、吸収したい技術だと心底思いました。先生の本を読んでいてもその関連付けを感じ、流石林先生と言ったところでしょうか、その本を読むにも一筋縄ではいかず、あの一冊の本の中に英語・国語・人生、の要素がびっしりと詰まっていたなかなか先へと進めませんでした。読んでいて感じたことはというと、林先生は英語を本当に理解させようとしてくれているのだという事です。これまで私が習ってきた英語は、理解するというよりむしろ暗記しなさいというものでした。だから私は、理解できないのにどうやってそれを覚えられるのかと、凄く疑問に感じていました。けれど先生の講義を受けたり本を読んだりして、英語の楽しさを知る事ができたので、私はこの夏中学生からの英語をもう一度、一からやり直してみようと思いました。

(……) 私なりに努力して、林先生から感じられる言葉では表せない何かを、見つけ出したいと思いました。そしてそれと同時に英語力と人間性をもっともっと向上させたいと思います。林先生に出会えた事で、私にとって新たな真剣勝負が始まったような感じがします。(……)

\*\*\* 言い換えれば『英語は絶対勉強するな』という

こと。ところで、該書をインターネットで調べてみたら、「英絶式」学習法とかで、「ネイティブの幼児と同じ方法で、我々も英語を学ぶべきだ、という外国語学習理論」と批判されていた。これはひどい曲解で、それは、該書の28頁の「残念ながら私たちはもう赤ちゃんではない」に始まる一節で明らかである。

\*\*\*\* cf. 斉藤孝・斉藤兆史『日本語力と英語力』(中央新書ラクレ, 63頁)

\*\*\*\*\* 例えば、その該博な知識に驚かされればなしの小谷野 敦氏に、

二十年ほど前、(……) 時から、若者を甘やかす知識人というものがぼつぼつでてくるようになったが、この四、五年はさらにひどい。(……) なんてそんなにガキに好かれたがるのかねえ。

11月13日——電車のなかで携帯電話でしゃべっている女子高生を怒鳴りつけた日に

『バカのための読書術』

(ちくま新書、「あとがき」より)

といった中島義道氏ばりの怒声があって、更に驚かされた。拙稿の基本的立場は、こういう「バカ」を軽蔑しながらも愛していることにあるので、甘やかしている、好かれたがっているとは思っていないのだが、氏に借問するとすれば、女子高生が、見るからにたちの悪い男子高生かヤクザっぽい男の場合でも怒鳴りつけることができますか、である。私の真意は、個人的嫌悪感をぶっつけあっても不毛で不愉快なだけ、自動車の携帯使用の罰則のように、電車内での使用は罰金制度にしたらいというもの。イギリスなどはキャンパスだろうが地下鉄だろうが、罰金の掲示はいたるところにあったが、あれを見習えばいいのである。

\*\*\*\*\* 誤解のないように云っておくが、子どもも人間だから、人間としては対等、一対一で向き合うことに変わりはない。

## (二) 理念と現実

なぜ小学校に英語を、という考えが起こったのか。英語に限れば、1) 学校で何年英語をやっても、英会話ひとつ出来ないという情けなさ(もどかしさ)のためと、2) 言葉の修得は年齢が早い方がいい、の二点であろう。そして反対派は、3)

小学校教師に英語が教えられるか、という資質の問題と、4) 他の学科への影響（学力低下）——英語以外にやるべきことがあるということを含めて——、といった理由を提起される。

先ず取り上げるべきは、『毎・朝』両方に顔を出されているだけでなく、賛成者の主張を逐一取り上げながら、烈しく自論を展開される大津氏であろう。

先ず英会話の問題だが、大津由紀雄氏は「外国語を学び始める時期は、早ければ早いほどよい」を、「信仰にも似た考え方だ」（『朝日新聞』）と一蹴。日本企業の米国駐在員家族の例などから、「それはふだん英語を話す環境にいる場合だ。小学校で週何時間か学ぶくらいで英語が身につくと思うのは、幻想にすぎないと少し考えればわかるはずだ。（……）根拠なく全国の公立小学校で実施に踏み切るのは無謀と言わざるを得ない」（『朝日新聞』）と、愚劣の極み、と言わんばかりである。しかし、失礼かもしれないが、よく見ると、氏の仰っていることは「少し考えればわかる」ことでもある当たり前のこと（常識）である。だから賛成派が常識を欠いているのなら氏の慷慨も納得できるのだが、賛成派もそんな常識は常識だから百もご存じのこと、大津氏の息巻かれる会話力などは視野に入れておられないことは、松川氏の「技能面での即効性を求めることは、学校教育の本質を見誤っている（……）、真の意義は初等教育の充実」や、セイン・カミュ氏の「（……）英語が自然に耳に入る環境は幼いころからあった方がいい」（『朝日』）に見られるように、英語教育ではなく小学校教育（の一環としての英語）と、英語の実力（英会話）というより単なる音声重視の発言といったことから明らかであろう。幻想に囚われているのは大津氏ではないか。

では、この幻想・常識欠如が何処から来ているのか？それは以下のような氏の発言に明らかである——発言の前半は、さすが大津氏、ちゃんと相手側（賛成派）の意見も徴収（聴取）しておら

れるのが分かるのだが、にも拘らず賛成派の云っていることは箸にも棒にもかからない、といった調子の反論は、まさに常識欠如そのものと言わざるを得ない——。

「発音は早いほどよいはずだという人もいる。だが、文法も併せて理解しなければ、自分の考えを英語で構成し、表現することはできない」（『朝日』）

「文法は教えず、あいさつなどの定型表現を教えるだけであれば（……）問題は生じないという意見もある。だが言語の基盤をなす文法を身につけなければ、自己表現も他者理解もおぼつかない」（『毎日』）

「言語の基盤をなす文法」、確かに学問上ではそうかもしれないが、言語の基盤をなすのは人間性ではないか。なぜなら、動物に言語はないのだから。

それから「自己表現も他者理解もおぼつかない」だが、言語学の文法をやらねばこういう人間になれないというのなら、私はもちろん大抵の大人もダメ人間に墮するが、こういう理念・理想を平然と小学生の教育に対して唱えられることに呆れざるを得ない。これらは英語でない日本語の世界でも、大人の世界でも達成が至難な事柄である。正しい自己表現が出来ない自己中の人間がうようよしているというのに、また、「他者理解」とは「人間性」が出来たということと同じなのに、それを小学生に要求するとは！小学生というのは、うっかりすれば動物に墮しかねない子ども、その動物性をなんとか人間性に止揚するのが小学校教育ではないのか。勿論、理想・理念はなくてはならない。しかし闇雲に高く掲げればよいというものではあるまい。理想の一人歩き、日本は言霊の国かどうか、一億玉砕・八紘一宇・大東亜共栄圏・鬼畜米英・打ちてし止まんに見られるような、亡霊が生霊として彷徨う国だ——この美名の元に、多くの日本人が犬死にしたことにも、私は間違った英語教育を受けた大学生の無念に接して感ずる、胸痛む哀切さを感じている人間である——。最

近よく聞く「命の大切さをどう教えるか」という理念もそうである。こんなもの口で教えられる、教材で教えられるとは思えないのだ。「命の大切さ」は、平素の（社会）生活の中での（熾烈な）コミュニケーション、或いは教師と生徒の抜き差しならぬ関係の中でしか身につかないと思っている。

氏の意識は「言語学」にしかなく、相手は小学生の英語だということが没却され、ひたすら、言語学という、恐らく知識人の中でも優秀な人間のやる学問と、言語学としての「英語」しか見ておられない。例えば、「発音は早いほどよい」と、「だが、文法も併せて理解しなければ、自分の考えを英語で構成し、表現することはできない」とがどうして結びつくのだろうか。「英文構成」や「表現」には文法は欠かせないが、「発音」に文法は関係ないからだ。いやそんなことより、「自分の考えを英語で構成し、表現する」を、氏はマジで小学生相手に考えておられるのであろうか。こんなことは、中学生いや高校生いや中・高の教師でも難しいのではないか——人のことよりも、私自身もあまり自信がない——。

次は教師の資質の問題。

発音は音声教材に頼るにしても、専門的な訓練を受けないまま英語を適切に使いこなせるとは思えない。（『朝日』）

全国の公立小学校へ一律に英語教育を導入することになると、教員が深刻な問題となる。（……）しっかりとした言語観や、言語教育観を持ち合わせているとは限らない人々に英語教育を託すことの危うさは、カラオケ上手に音楽教育を託すことの馬鹿馬鹿しさを考えれば容易に理解できるであろう。学級担任が英語を教えることに教育的意義を認める論者もいる。興味深い考えだが、児童が誤った知識や運用能力を身に着けてしまった時、だれがそれを指摘し、矯正してくれるのかという重大な疑問が残る。（『毎日』）

ここにも、「英語を適切に使いこなせる」「しっ

かりとした言語観や、言語教育観を持ち合わせている人」という高度な表現が散見されるが、じゃお訊きするが、氏はそれなら中学や高校の先生は、こんな凄い教師だと思っていらっしゃるのだろうか。とすると、そんな教師の下で受けた英語教育（のみならず他の学科も）がうまく機能していない——学力低下の嘆きという現実——のはどうしてですか、と問いたくなる。なぜ小学校教育だけに、こんな高度（硬度）な難癖をつけられるのか理解に苦しむ。

大津氏は「他者理解」などと言うが、児童という他者を理解していないのはあなたではないですか。「誰でも子どもだったことがあり、今も存在の底の底には子どもそのものの心が生きているはずなのに、ほとんどがそれを忘れてしまっている」（岡本太郎『自分の中に毒を持って』、青春文庫、170-71）という言葉思い出していただきたい。

先にも云ったが、まだ未熟で半人前である小学生を、（知識はいい加減でも）一応は人間らしくする教育が小学校教育というものだ、と私は思っている。それには、大津氏のような専門家は要らない、と云っていいだろう。全科目それぞれの権威に教えてもらおうとなったら、児童は高邁な教えの重みで圧死、或いは頓死いや憤死するだろう。「カラオケ上手に音楽教育を託すことの馬鹿馬鹿しさ」も、果してそんなにバカにしたものであろうか。カラオケ上手でも、歌を真に愛している人なら、歌い方だけでも習えばいい。教える人だって、「音楽教育」なんて大それたことなら断るであろう。大津氏は、音楽・歌がお嫌いなのか\*。音の美しさ、繰り返しているうちにウツリする、あの醍醐味。音・発声・音声そして歌（声）は、やればやるほど効果は目に見えて、楽しくなるもの、さほど難しく考えることもない。

ではどうする？さようここからが真骨頂なのだが、小学校教師の英語力が弱いのは、これまで小学校での英語教育を想定していなかったのだから当たり前なことだ。もちろん、英語を10年も習っ

たからには、そういう事とは関係なく英語の実力はついているべきなのだが、ついていないのは教育する側にも責任はある。大津氏・和田氏のように、すぐれた教師の不在を声高に叫ぶだけでなく、大学側もせめて音声的な面だけでも有能な教師を育てる術を模索すべきだろう。もちろん、今までなかったもの即ち無から有を生み出すのだから、時間と根気がいる。大学の教師として、語学の専門家として、そういう覚悟を表明して欲しかった、と云えば無い物ねだりになるだろうか？とにかく基礎的な「発音」「単語」くらいは教える能力をつけるような教育をしなければならぬだろう。そういう教師を育てる任務が大学側にかかってくるのだ。そして、それは決して難しいことではない。大学の教育が変わらないと教育は変わらないと言われるが、大学の重い腰はなかなか上がらないのは実証済み、小学校の英語導入という一事を以て、教育全体を変えるチャンスだと私は思っている。

\*種を明かせば、私もカラオケは嫌いである。歌も音痴である。しかし、これでも小学生時代は歌うことが好きだった、特に軍歌が。それが、文明化のあらしに巻き込まれて沈黙考、いつしか歌を忘れて「文字」の人間になってしまったらしい。歌を忘れたカナリヤは捨てればいいが、子どもと「私」は捨てるわけにはいかない。私は「文化・文字」に救われたが、子どもは文明の騒音から、先ず正しい音の教育によって救われねばならない。音楽など所謂将来の受験科目には関係のない芸術系が冷遇されているのだから、せめて微力ながら英語で（英語から）「局面を転換」しなければならない。

私の教えている英語ができない学生（決して頭は悪くない）に、熱狂的なジャズファンがいる。しばしば、CDから流れてくる歌の、特にインパクトの強い英語の発音と意味を問われる。歌のリズムと英語の音声に魅せられた彼女を見る度に、私の聞く力の貧しさの故に、完全には満足させてやれないもどかしさを感じ、私もその犠牲者である中学時代（初め）の間違った教育に思いを馳せるのだ（國弘氏の恩師のような先生に出会っていたら、私も真面目な生徒だったから、ひょっとすると今頃は2,3カ国は操れるようになっていたかもし

れない。

高尚という言葉を使ってきたが、賛成派の中嶋嶺雄氏にも、私は高踏的な姿勢を感じている。

中嶋氏は中央教育審議会委員という肩書を持っておられるが（松川氏の専門委員という肩書とどう違うのか）、その賛成論は説得性に弱い、と私には思える。見出しから大上段に振りかぶった「世界で活躍するために」が格好すぎる。子どもはプロ野球選手とかいった具体的なものに憧れるので（夢を抱くので）はないのかと私は思うのだが、「世界で活躍するために」は「少年よ、大志を抱け」に類して、もう少し年齢がいつてからの話ではないだろうか。そうでなくても、日本だけでもいろいろ問題が多い状況に彼らは居るのだから。とにかく、小学生にはっぱをかけるにしては大袈裟である。だからであろう、

まず指導者をどうするかだが、あまり堅苦しく考える必要はない。地域を探せば英語の使い手はたくさんいるはずだ。

導入にあたっては完璧な英語より、コミュニケーションの道具としての英語を身につけさせることを優先すべきだと思う。

問題は大学だ。英文学専門の先生が全員に一年かけて英語の小説を読ませるような教育では困る。

という景気のいい言説が表れる。だってそうではないか、指導者の問題は、大津氏が非常に懸念されているものであり、それに気を遣った松川氏が、「小学校の担任の先生が英語教育に携わることにについては、疑問視する声が少ないからである。しかし、小学校の先生による実践には全科担任制の経験を生かした子供の総合的な把握による教育的体験の創造がある」と言われているのに、「あまり堅苦しく考える必要はない。地域を探せば英語の使い手はたくさんいるはずだ」はあまりにも安易で無責任に聞こえる。更に、「完璧な英語より、コミュニケーションの道具としての英語を」だが、

小学校教育で完璧な英語を云々することじたいバカげているのではないか。いやその意味でなら誰がそんな英語を身につけていると、自信を持って云うことができるのか。次に「コミュニケーションの道具としての英語」だが、「道具」をつけたらコミュニケーションがお粗末になるわけでもなし、これも小学校教育では（のみならずどこでも）全くムリ、思いつくだけでも背筋が寒くなる話である。

ここでついでに、松川氏とカミュ氏の比較をやっておく。松川氏は、

誤解を恐れずに言うなら、英語が、教養ある大人である小学校の先生が扱える、特別でないものになった時、英語に対するある種のルサンチマン（うっせきした感情）を乗り越え、日本人が英語と普通に付き合うことが始まるように思う。

と、私が反対論者なら赤面するであろうような卓越した見解を披露される。確かに、「教養ある小学校の先生」は現実問題として望蜀<sup>ぼうしよく</sup>の感はあるが、ルサンチマンとは炯眼<sup>けいがん</sup>、これでは（ルサンチマンが相手では）、どんな立派な理論・意見も役に立たないわけで、氏のような「臨床家」が求められるわけだ。

だが松川氏でひとつ気になるのは、技能という実際的なことにあまり意を致さず、云ってみれば人間教育に偏りすぎている恨みがあるということだ。つまり、所詮、小学生は技能という実際的なもので教育せねばならないからだ。松川氏もやはり知識人・学者、小学生に高いものを多少は求められているようで、それは、「(……) 技能主義を超えて、小学生にどんな成長がもたらされるか、見極めるにははまだまだ時間を要すると考えている。」の、「成長」や「見極めるにははまだまだ時間を要すると考えている」に窺うことが出来る。更にそれは、

ここ9年ほど各地の公立小学校で取り組まれ出した英語の授業実践を見てきた。長らく中高の英語教員養成に携わってきた者として、英語を教えるということの固定観念が多いに揺さぶられた。現在、小学校で行われている英語活動の斬新さと多様性には目を見張る思いである。

という書き出しからも窺えることであって、この文章を見る限り氏は現場の教師としての経験がなく（一教員として英語を教えたのではなく）、飽くまで教育の実践を見て来られたにすぎない。その上、小学校ならまだしも、中高の「英語教員養成」に携わってきた人である——これは、「英語を教えるということの固定観念」を持っておられたということにも現れているように思える——。加えて、審議会専門委員になるほどの人、その人が見られた授業は特別仕立てのものである確率は高い。教師も模範的で例外的な教師であり、松川氏の感激は特殊な場合にしか当てはまらない、と考えられる。しかしながら、たとえそうであっても、「百聞一見に如かず」で、氏の見られたものは反対派の見聞・意見に勝る、と私は思っている。松川氏と違って全面的に技能面を押し出し、しかし結果的に松川氏と同じ賛成派に立ったのがセイン・カミュ氏である。さすがにタレント（才能）のあるタレント外国人だけのことはある、その意見は、極めて堅実な現実感覚の賜物、と云うことが出来るだろう。

一番大切なのは、英語に慣れること。

(……) 英語が自然に耳に入る環境は幼いころからあった方がいい。

その上で、小学校にはカリキュラムも教科書もなしで、その年齢に合わせた最低限のことを教えていく。

例えば、1年生ではあいさつができるようにということだけを決めておく。あとは教師の裁量で、歌やゲームを交えているんなあいさつの仕方を教える。2年生ではアルファベットが言えて、数字が数えられるように。3年生では簡単な単語の読み書きができるように(……)。



と説かれるのだが、この文の何処に、大津、和田両氏の強調されて止まない「英語力」「教師力」があるだろうか。全ての物事の基本である「慣れ」から、「最低限」「アルファベット」「カンタンな単語」という、それこそ最低限のことばかり仰っている。これを見て多分、反対論者は、小学校教育の墮落だ、と息巻かれるのではないか。そこで、些か解説の労をとれば以下のようになるうか。

先ず、「英語が自然に耳に入る環境は幼いころからあった方がいい」の「自然に」に注意を払っていただきたい。ムキになって、何とか実力を、と力む教師の姿が哀れに見えて来ないか。次に、何かに倚りかからねばやっていけないような「個」のない日本人は、「カリキュラムも教科書もなしで」というカミュ氏の言葉を拳拳服膺けんけんふくようしてもらいたく、いたずらに抽象的で高度なことを言う専門家には、「その年齢に合わせた最低限のことを教えていく」という現実感・現場感覚を味わってほしい。そして引用最後の節「例えば」から始まる文章にも、会話力とか英語力とかいうような大それた言葉は遂に見えずじまいであった。

### (三) 楽しさについて

カミュ氏は「小学校に英語を導入する前に必要なのは、大人たちが子供にとって英語を楽しく学べる環境をつくることだと思う」とも言われている。これは、他の学科は楽しく学べる環境があるとかいうことではなく、学校へ上がる前段階、所謂幼児教育的な意味合いいわゆるで使われているのだが、私はこれを、日本の学校は楽しくないところが多分にある、と拡大解釈したいのである。というのも、カミュ氏のこの句が出てくるまでの文章は(冒頭からのものになるが)、

1歳半の息子は、いま、アルファベットのおもちゃのボタンを押して「A、エイ、エッ、エッ、エイ」といっています。どの国の赤ちゃんでも、言葉を

学ぶ順序は同じでしょ。まずは短い単語をいえて、ひらがなアルファベットを読めて、それから単語を増やして文章にして……。

なのに、今は中学で「受験に必要です」と言ってもいいほど、いきなり文章の英語教育が始まる。これは名詞、目的語、現在完了形と小難しいことばかりいわれる。ほかの教科も難しくなって、自我も芽生えてくる時期。「これではやってらんねえよ」ってことになる。

というふうに、ほんとうに「やってらんねえ」ほど面白くない(楽しくない)光景が導入されているからだ——ここで急いでつけ加えたいのは、小学校英語が実現すると、この中学英語も面白くなるはずだ、ということ。いや寧ろ、生徒の方からより高次なそういうことを必然的に求めてくるはずだ、という私の考えである——。

思い起こすのはバブル期の‘workaholic’、これも、学校で先ず楽しさを第一としなかったつではなかったか。さよう、何はともあれ「楽しく」なければならぬ——なんならここで、‘All work and no play makes Jack a dull boy’という格言を想起していただきたい——。ところが日本人は、昔からこういうものを疎んじ、ひたすら我慢して働く(‘work’)ことを美德とした。しかし今の子どもは違う。

小学校時代の楽しさは、「共に・一緒に」遊ぶ・勉強する、から生まれる。これに先生が加われば最高だ。先生は高みから知識を授けるだけでなく、下に降りて生徒の目線に立つ。そこで共に楽しんでから生徒を引き上げるようにしなければならぬ。

事は小学校に限らない。日本の教育(に留まらず社会全体)に最も欠けているのもこの「楽しさ」ではないか。どんな立派な事も、習う方が「楽しい」(難しいけど楽しい)という気持ちがないければ、豚に真珠であろう。大学の「私語」も、香川大学の岩月謙司氏の言葉を借りれば、「学生の姿勢を問う前に、教師が授業を楽しんでいるか」と

なる (cf. 『女は男のどこを見ているか』, ちくま新書, 209 頁)。極論すれば, 教える側が, 勉強意欲のない学生に人間的に共感を覚え得るか, が問題となるべきであろう。

面白くなければ立派でないとは云わぬが, 日本人の会話の面白さ・内容の貧弱さ・話すべきものがない, ということは今に始まったことではない。だからであろう, 和田氏は, 小学校から「英会話力をつけようという発想」に対して, 「英語コミュニケーション能力で重要なのは, 道具としての英語より中身であることがないがしろにされていることだ」(『毎日』)と仰る。もちろんこれも正論だが, やはり小学生の英語に対しては過剰要求であり, 「過ぎたるは及ばざるに如かず」という格言いや苦言を呈さざるを得ない。いや, 中身は, コミュニケーションをする同士が, 先ず, 何らかの意味で「楽しい」という気持ちがなければ発揮されまい。どんな上等の肉も, 味付けが悪い・味が無ければ, 無味乾燥だ。

恐らく, 勤勉なる日本人は, カミュ氏と私の「楽しさ」論にムカつかれることだろう。学校の授業は遊びじゃないのだと。しかし私は, 如何に高邁であっても遊びが基本でない考え・人間性は信じられない。日本人がコミュニケーション下手というのも, 遊び下手と同義だと思っている。直ぐに抽象的な正論を吐きたがり, 深刻になる欠点も, そこに原因がある。

ユーモア, 日本人にこれが欠けていることはいまさら云うまでもないことだが, どんなこと, つまらんことも, 難しいことも, 悲しいことも, すべてこれで包む, オブラートのように柔らかく包むことを知らない。例えば, 中学一年の教科書に出ているアメリカのハンバーガー店での会話を, なんと何人ものエライ人が異口同音にやり玉に挙げている。

Demi: Two hamburgers and two colas, please./  
店員: Large or small?

Demi: Large, please./ 店員: For here or to go?

Demi: For here./ 店員: Here you are.

という中学一年の文章に対して,

例えば For here or to go? という表現 (……)。その状況以外で用いられることはなく例文として極めて発展性に乏しい。(……) 生徒は「英語圏のハンバーガー屋では, 品物を持ち帰るかどうかを For here or to go? という表現で尋ねてくる」ということ以外, 何を学んだことになるのだろうか。こんな表現は海外旅行者用の会話本にでも載せておけばいいのである。(斉藤孝・斉藤兆史『日本語力と英語力』(中央新書ラクレ, 2004 年 4 月 10 日発行, 8-9)

といった侮言に続いて, 「楽しさ」についても,

今の学校教育は最初からただ楽しく, とりわけ英語では実際に使える表現でやりとりをしましようという気軽さです。(123 頁)

と, 私の考えと真っ向から対立する意見。更に, この拙論のテーマに関しても, 「小学校での英語必修の愚」(50 頁)と私に平手打ちを喰らわせられる。

次に, 『文芸春秋』(2004 年 10 月号)には, これまた高名な数学者でお茶の水女子大教授の藤原正彦氏が, 南山短期大学教授の近江誠氏との対談で, 劈頭から,

(……)ところが最近の英語教育の実態を聞くと, 中学校の教科書でハンバーガーを注文するときの会話が載っているそうですね。そんなくだらない例文を身につけたとして, 日本人が内容のある英語を話せるようになるのか疑問です。そこで近江先生の本を拝見したら, 古今の英語の名文をとにかく声に出して暗唱するというユニークな学習法を提唱されていますね。(335 頁)

と息巻かれている。そして最後の極め付きは,

最近の中学校の英語教科書に登場する「ハンバーガー英語」(……) いかにも実用的でありそうに見えるこの会話であるが、これを習ってもまともな議論を戦わせる英語力へと発展していくことはほとんど期待できないことは明白である。(茂木弘道『文科省が英語を壊す』, 中央新書ラクレ, 37-38) — ここにも、「まともな議論を戦わせる英語力」などと、私でも怖じ気をふるうような言葉がスパスパと何の躊躇いもなく出てくる(引用者注) —。

といったものだが、こうなると、私はまさに四面楚歌の境地である。

テキストが、全てこんな(低次元な?) 題材ばかりで充滿しているというのなら問題だろうが(そんなことはあるまい)、1) 何よりもまず、生徒の実生活に密着した、卑近な日常生活に基づいている\*、2) こういう素朴な内容と素朴な文体の題材のときこそ、深くて高邁な哲学的・倫理的・思索的な面を忘れて、思い切り語学的な面に習熟させる、という二点で私は大賛成である。生徒たちは日本のハンバーガー店の経験があるのだから、それとの比較ですばらしく面白い、且つ有意義な授業になるはずだ。料理で云えば、並みの材料を腕で最高の料理にしてみせるという奴である。生徒には無縁な、徒に高価な高級料理を出すよりも、学生向きの安い材質で高級料理以上の味を出すに越したことはなからう、ということだ。

寧ろ、ハンバーガー店での会話に発展性を見出し得ないとは、教える資格がない、少なくとも、中学生向きの資質ではない、と云えるのではないか。紙面の都合で私の料理を揃えてお出しするわけに行かないが、以下のようなことだけからでも、私は一時間でも2時間でも喋りつづけることができる。何事も繰り返した。そして繰り返しは退屈なものだが、その繰り返しに楽しさを見出すときに真の進歩があるのだ。習ったこと・教えたことを時と場所が違えば形を変えていくだけでも繰り返す、しかもそれがウンザリという気にさせない、ということに命がある。だから、教師がよく発す

る「これはこの前教えたところじゃないか。もう忘れたのか」という怒声に対して、一度や二度教えてもらって覚えていると思う方がオカシイ、と私は考える人間である。

では、ハンバーガー店での会話を発展させてみる。まずは同じ状況での日本語の言い回しとの比較だ。もちろん、‘I would like to have...’といった完全な文章で言い換える作業も入ってくる。次は please という日本語ではふつう使わない言葉の文化的背景、そして I am pleased..., Kola, coke, Coca-Cola (くだらんか), colas から複数概念、といったことから、for-phrase と to-不定詞の徹底習熟 (for studying と to study), for here を元に一般的な near here, さらに Here it is. Here we are at ...Here come the boys. Here they come. という語順、そして to go という「持ち帰り用の」という成句から go が単に「行く」という狭い意味合いだけでなく、go mad, go out (have a date), on the go などの例からこの語のニュアンスを掴ませる、to go と take out 「持ち帰り」の違い、そしてついでに、「保険の契約をする」は行き過ぎだとしても、take out our dog for a walk 等々、先生の知識の範囲で興の赴くままに生徒を授業に引きずり込めばいいのである。更に、日米の食生活の比較、他のレストランでの光景の比較。ここで思いついたのもうひとつ例示すれば、「ボーイ」。恐らく小学生はレストランなどで「ボーイさん」と呼ぶと思っているであろうから、‘Waiter, coffee, please.’ というのをついでに示してやる — ついでに「先生、…」という呼びかけは ‘teacher,’ でなく ‘Sir’ (‘Mr.’, ‘Ms.’) と脱線する —。更に、英語では「どうぞ」というのを必ずつける、多分それが、ひょっとすると日本人に馴染みのない「チップ」(‘tip’) に繋がるのでは? と結びつけ、次に連想作用からポテトチップ (‘potato chips’) に跳び — 英語は ‘chips’ と複数で扱うが、日本語の単語との決定的とも言うべき使い方の違いであ

る単数・複数という数概念も、仄めかしてもいいかもしれない——、このチップは chip (tʃip), そして野球好きな少年少女たちのために、‘foul tip’ ‘fair ball’などと説き、ゴルフ狂のパパのためにと、‘chip in for a birdie from the green edge’。どうです、面白くないですか。

脱線はこれくらいにして元に戻ろう。

近江氏の「名文暗唱」、別にユニークなアイデアでもなんでもないと思うのだが、それには名文にまず惚れこむ、名文の文体と内容に感嘆することができるということが先決であろう。そこまで要求できる（期待できる）中学生は秀才中の秀才、そういう生徒は言われなくても自分でやるんじゃないですか、あなたがやられたように——私は残念ながらやらなかった・沈思煩悶していた・気付かなかったので、今でも後悔しています——。そんな高等なことよりも、私が次の章で詳述する「音」に慣れ・愛着し、やがて意味はよく判らなくてもお坊さんが経文を丸覚えするように、子どもが歌詞の意味は判らなくても節回しで覚える・音の美しさで覚えるように、という単純なことを考えた方がいい。これができてからの話でしょう、名文暗唱は。

反対論者は「会話の内容が大事」と言われている。その内容が、空疎になるのは生活の裏付けがない、つまり知識として上から教わったものでしかないからではないか。いくら高度な知識があっても知識は知識（誰が持っても同じもの）、会話の面白さとは、その人だけの話術と話の内容があるということ——言い換えれば「独創」——と、それに他者が共感を覚えるということだ。そしてそれは、小学校時代のしっかりとした「遊び」「楽しさ」が土台となっているか、そこで人間関係で揉まれたか（そしてそこに先生の参画があれば尚良い）、が大きな影響を持つと私は思っている。

\*この卑近なものから高尚へ、という志向が、日本

には乏しいようだ。上意下達かどうか知らぬが、上から教えてやろうという態度がひど過ぎる。民主主義が借り物のせいとか、教えることにおいても、下意上達の姿勢がない。「教えた」からカシコクなるのではない。「教えられた」ことを、自分で進んで実践・繰り返し（予習・復習）して始めてものになるのだ。

#### (四)「音」を通して

これまでは、小学校英語教育の方法・態度——英語の manner が単・複でこの意味の違いを出しているのは面白い——についてであったが、ここでは教える対象そのもの、つまり「音」について考察する。

云うまでもなく、言語は音声と文字からなる。どちらが基本かというのももちろん「音」である。この点、日本語は元々文字を持たない言語だったということは示唆的ではないか。それに、擬態・擬声・擬音の豊富さ、これに準じた無数の外来語、それを表記するのに（表音のために）、平かなとカタカナを発明するほどの「音」への執着ぶり。そして英語との比較でいけば、母音主体の日本語に対する子音主体の英語、しかも、この子音が右脳に関係しているとあっては、まさに発音の勉強は無限で人間性にも関係してくる（英語のイントネーションといったものですら、大袈裟かもしれないが、個人主義に関係すると思っている）——反対論者が声高に叫ばれる「英語力」、使い物になる「英会話力」、それから常に問題視される「受験勉強」などは、すべて「左脳」重視の産物であろう——。

更に、θ, δ, f, v…日本語にないこういう発音、「違う」ということで興味を起こさせ得ることは必定である。「違い」「異質」なものを昔から日本人は疎ましく思う傾向があるが、最近の若者は多様な価値観或いは混濁した現状に慣れてきたせいとか、違いがわかる人間とまでは行かずとも、それに引き寄せられるところがあるのではないか。

教室での私語も、違いや変化のない授業の進め方・教師の話し方に、ウンザリした結果の反応だ、とも云えるかもしれない。

音声についてはCDやVCRで生の音を、口陰蓋図で舌の位置などを確認できるし、言語学のように難しく考えることは全くない（ネイティブも必要ない）。

とにかく、言葉特に英語の基礎は「音・発音」なのだから、それに習熟させ（<sup>なま</sup>楽しませ）、中・高・大の教育で大きく伸びる基礎を培ってやればいいのだ。

「音・発音」と云うと、言語学者などからバカにされるかもしれないが、この面で日本語と英語は全く違っているという認識が足りなかった、言い換えれば音声も文化であるという認識の欠如が、わが国の英語教育がいつまで経っても正常発育を遂げ得なかった最大原因ではないか、と私は思っている。そういう意味で、以下に見る、作曲家の武満徹の言葉は謹聴に値する。

（人間の）言語は、近代科学の展開に伴ってその語彙を豊かにして行きながら、逆に音の振幅を均質な狭いものにしてしまい、音は様に「眼鏡をかけた眩き」になってしまいました。豊富な語彙に依って対象を正確に名指すことが可能だと考えたのは、錯覚にすぎないことが判った。なぜなら、語は相互に区別されるために厳密に規格化され、意味内容の容量を極めて狭いものにしたからです。それによって、情報伝達という点では普遍性をかちえながらも、存在そのものとかかわる多義的な意味やイメージ性を失ってしまったように思います。（……）

響きが、様に、「眼鏡をかけた眩き」のような抑揚を欠いたものとなった「ことば」は、正確さを目指すほどに、対象の全体からは遠のいていくように思われます。「声」を失った「ことば」で考えたり表現したりするのは、音楽家である私にとっては、言いようのない齟齬感を味わうことなのです。（……）

文字を持たない民族の言葉は、発音と伝達される内容とのかかわりが大変密接です。表象記号としての文字を持たないために、語彙は少ないが、

ひとつひとつの言葉は多義的なひろがりを持っています。そこでは言葉は常に、その発声と連携の仕方で多様に変化します。発声の息継ぎによって、表そうとする意味がまったく異なったものになったりする、そのことが言葉の抑揚を繊細な変化に富んだものになっています。

（……）

日本の音というものを考えていくと、どうしても「自然」へ到ります。

武満徹/川田順造『音・ことば・人間』

（岩波書店同時代ライブラリー、241-42）

「音」「発音」、これだけで小学校英語と言えるか？そんなもの直ぐに種が尽きて教えることがなくなるか、空疎な授業になって生徒を退屈させるだけだ、とまあこんなふうな反論もあるかもしれない。

これは言葉の基本は「文字」ではなく「音」である、という認識・自覚の欠如に他ならない。受験勉強に音楽が不要であつたからか、日本のインテリは書かれた文字には<sup>ほいき</sup>拝読するも、「音」には極めて無関心と言うことが云えるのではないか。例えば、になるかどうか、Seeing is believing. は「百聞一見に如かず」と訳されるが、これだと「聞く」方を軽んじたことになる。しかし私には、これは「五感」の優劣を表わしたものと思えなかった。今回、『日英ことわざ辞典』（池田弥三郎/ドナルド・キーン監修、朝日イブニングニュース社発行）で調べたら、=Words are but wind. とあり、英訳（例）としてOne picture is worth a thousand words. が挙げてあった。これだと、「言葉より目は多くを語る」「言葉より先ず視ろ」に近くなっていくように思えるのだがどうだろうか。

ついでに洒落めくが、「音」は'sound'、ところがこれは「音」という意味以外に「健全な」という意味を持っている。「鐘が鳴りますキン、コン、カン」、おお！何という健全さ、「自然」のおおらかさ……、そう、動物には「音」はあっても

Words はない。

動物は「音」がすべてと、小学生を動物に準えては抵抗があるか。それなら中国語の「四声」を取り出そうか。この言語は、何はともあれ、この「音」をマスターしなければ始まらない。

とにかく、「音」-「歌」は人間のみならず動物の活気の源泉である（文字は沈黙思考の源泉?）。これにより、クラスを活気づけ、英語の導入で先ず国語との比較に始まり、小学校では教師が全学科にタッチしているという特徴を活かして、他学科へ波及効果を期待することができる——僅か一科目の追加で、そうでなくても低下しているのに、という不満はそれこそ姑息、それこそ（その元気のなさこそ）「音」文化の欠如を示すものと云えよう——。また、クラスが騒々しいのは、子どもに「音」の面での教育がなされていない故の彼らの反乱かもしれない。そう言えば、英国の劇作家バーナード・ショウに、『マイ・フェア・レディ』という映画になった、「発音」を矯正するだけで変身を遂げた、ヒロイン・イライザを描いた『ピグマリオン』というドラマがあった。

良い指導者がいないのは小学校に英語がなかったからで、「音声」に限れば、大学がそういう面での英語を教えることができる教師を育てることはやさしいし、また、小学校で発音がものになれば——別にネイティブのような発音をせよと云っているのではない——、中学校の英語授業も様変わりし、英語力もつき、英会話もそこそこ内容のある話ができるようになるだろう。現在、大学入試でヒアリングということが言い出されているが、これも楽に処理される問題となろう。

## (五) むすび

さて、(二)の冒頭で列挙した4つのうちの最後の4)を、これから問題にするのだが、意外にも(?)、大津氏はこの点に関しては関心が乏しいようで、僅かに、

そもそも小学校は完全週5日制で、カリキュラムが過密状態だ。学習内容を3割削減した学習指導要領のせいで学力低下が心配されるところに英語が割って入ると、他教科の時間を削ることになる。(『朝日』)

と云われているだけだ。考えれば当然のことで、こういう形式的・数字的なことに言語学者の関心がそう及ぶはずがない、というかバカバカしくて、本気で相手にしたくなくなるだろう。それに反して、和田氏は（受験の<sup>たいか</sup>大家だからか）、驚くほどこの、ある意味で分かりきった事に執着なさっている。

現在、子供が本も読まなくなっていることを考えると、むしろ日本語能力や日本語の読書などのほうが、英語教育より根本的な問題だと私は考える。小学校教師が全教科9科目を教えることを考えると英語に力を割くより、中身になる日本語や社会科、科学などに力を割いてほしい。

(……) 英語を多少役立つレベルまで小学校で教えるとすれば、週休2日の現在毎日の授業が必要となるだろう。だとすると、それだけこれまでの教科学習は犠牲になるということだ。

2002年の学習指導要領の改訂の際も、総合的学習の時間の導入のために、教科学習の授業時間が大幅に削減され、そうでなくても学力低下が問題になっているのに、さらなる学力低下が懸念された。これ以上、理数科目の授業時間が減らされれば学力的に諸外国に太刀打ちできなくなるし、国語や社会が減ると英語ができでも話すべきコンテンツを失ってしまう。

(……)

昔のように学力レベルや英語の読み書きレベルが高かった時期であればともかく、現状を鑑みると小学校授業への英語導入は絶対にまずいとは言わないが時期が悪い(……)。

分かりきったこと、さよう、「英語」が入ればその分しわ寄せがあることくらい小学生でも分かる。問題は、たった一科目でここまで弁じ立てねばならぬ事に対する情けなさだ。一科目増が、他の全科目を低下させると言わんばかり（更に、大津氏

と同じような「役立つレベル」とか「話すべきコンテンツ」などという過大要求)。学力低下は、数字いじりのような問題ではなく、もっと根本的な原因に基づくものではないのか。それは内容の問題であり、教え方の問題だ。そしてこれを明らかにするということは、(二)章での大津氏との対決を受けて、本章(五)では和田氏との対決、ということになるのだが、私がこれまで頻用してきた「違い」と「比較」という言葉が、氏との対決の道具(真剣)になる。

まず、和田氏は「英語導入は絶対にまずいとは云わないが」が示すように、小学校英語そのものについての明確な考えはお持ちでないようなのだ。それが証拠に、『「英語脳」のつくり方』(中央新書ラクレ, 2003/11/10)では、自分の娘の例から、幼児期こそ英語にあまり乗り気でないが、それを過ぎると、寧ろその意義を認めておられるのである\*。

ということで、和田氏の導入反対の理由は<sup>からめて</sup>搦手、つまり大津氏と違って英語そのものでなく、それ以外の他学科と教師という見地からのものになっているのだが、「比較」を通して・「違い」の認識を通して、という教え方をすると、和田氏のような心配は無用となってくると思われる。

これにはまず、一般的に日本人は「もともと僕たち日本人とは身近な人びとの間の『和』を保つという等身大の理想を追うのに熱心でした」(大平 健『豊かさの精神病理』, 岩波新書, 240頁)から来る、異質なもの・自分たちと違ったものの扱い方が下手だったということが判らなければならない。英語の比較表現が実に多彩で微妙、私など英語の妙味はこれにある、くらいに思っているのだが、この修得が日本人にとって難しいのは、日本人の比較思考の弱さによるものであろう。だから、比較が浅いものになり、差別に繋がる。深い比較思考によって始めて、違いを深く掘り下げた認識が可能となるのだ。

この脈絡でもう一つ云っておきたいのは、私が

よく口にする「連想」と「一人ひとり」である。これもまた、比較思考の産物であり、異同に敏感であるから個に目が行くのだ。真の比較は個の正しい認識なしに成立し得ないのだ——「一を聞いて十を知る」も比較・連想なしには成立しないだろう——。

話を本題に戻せば、英語の授業を通して、先ず国語との比較ができる。しかも、全科目を通して同じ先生が教えるのだから比較しやすい。この二つの言語は全くと云っていいほど違っているのだから、いくらでも比較して喋ることがある。そして同時に、国語そのものも、単に国語だけを教えるより、比較により、より理解しやすくなる。それだけではなく、比較思考に慣れた生徒は、学科間の比較考察に始まって、日常の人間同士の正しい比較も行えるようになる(比較が差別につながるのではなく、「違い」そのものを楽しみ・愛し・尊ぶようになる)。それから、英語は26文字の組み合わせで無限のことがができるということからでも、数学の順列組み合わせの説明をやることだって可能である。言葉は人間生活の反映だから、英語を通して社会やその他の学科を教師の力量に応じていくらでも<sup>しょうりょう</sup>渉猟できる。敢えて云えば、こういう比較思考を身につけさせねば、どんな科目だって真の実力はつかないのだ。寧ろ、英語という一科目が、邪魔物のように割って入ることで、全科目が生き、授業が生き生きとしてくるのだ。

次に、「昔のように学力レベルや英語の読み書きレベルが高かった」ということだが、昔はごく一部の頭のいい奴しか高等教育を受けなかった。そしてその時代でも、英会話は大半ダメだった。加えて現在は、ひと頃流行った、知識人が愛してやまなかった「思想」も消滅した。語るべき深遠な思想はなくなった。人間と人間の在りよう(だけ)が問題となる時代なのだ。全科目を通じて生徒に接する小学校教師は、この点で意味がある。週一回くらい顔を合わすだけでは、学科の知識教育だけで人間的なものは生まれにくからう。

もう少しこの問題を考えてみる。「総合的な学習の時間」というのがあるが、使い方が判らないので、何をやってもいいということから、責任を問われない英語会話をやっているらしい。専門家に限らず、総合となると何をしゃべっていいか・何を教えていいか判らない。「総合的な学習」も、内容の総合ではなく、総合という単科科目名となってしまうのだ——それも無理からぬこと、というのも総合とは、いろいろなものの比較から始まる作業だから——。そして統合とは、総合を構成する各要素が、より緊密な連携と一体化（総括・統括）に近づいたことの謂いである。

クラスがうまく運営される基本条件は、教師が一人ひとりの人間の違いを（比較して）把握しているか、にある。クラスにはさまざまな生徒がいる。能力のある者ない者、科目による得手不得手、文部科学省・教育委員会が定めたその学年にマッチしているとした基準でも、理解不能者はいくらでもいる。比較思考を楽しみとしない教師は、クラスの多数を占める中間の生徒を対象とする。これでは、中間の上半分は上へ、下半分は下への傾向があるので、クラスはひどい場合は壊滅的になる。クラスの統合とは、上の者はさらに上へ伸びようとし、落ちこぼれもそれなりに参加しようとする、ということに他ならない。もちろん教室だけでは処理できなくなり、勢い放課後にまで授業が延長してくるだろう。生徒はできる者もできない者も、クラス全体を統合する教師の熱意を感じ、できる者はさらに高度な質問、問題を抱えた生徒はその問題を教師にぶつけるようになるだろう。これが進んで、生徒の方から正規の授業とは違った特別授業をやってくれということになるとしめたものだ。塾に行く必要もなくなり、学校の値打ちはいやが上にも増す。それだけではない。ここから地域にも伝播し、放課後の特別授業に、（英語は特に彼らも興味があるので）噂を聞きつけた父母たちも参加するという、考えただけでも胸躍る事態の到来も夢ではなくなる——そう云えば、カ

ミュ氏の記事の見出しは、「親も参加 楽しむ授業に」だった——。

かくして、中学では、小学校で既に、発音・単語を中心とした英語の基礎の基礎はほぼ出来上がっているのだから、単語中心から文章へ移行するという作業を、読み・書き・話す・聞くという作用を通して展開するわけだ。但し、呉々も、従来の和訳だけはやっていけない。飽くまで直読直解、直聞直解である。出来る生徒には、国語の教科書の日本語を英訳させてもいいだろう。当然、日記を和英両方で書かせ、日本語の訂正と英文訂正を行うということもやる（悩みの相談といった生活指導に発展するオマケがつくかもしれない）。

最後にひと言。教育（‘educate’）の語源は「引き出す」、というのに私はあまり関心がない——「引き出す」とは相手側に素質というものがあることを前提とするが、「惹きつけ・引き寄せる」は人間でありさえすればいいからだ——。私はできる者もできない者も、磁石のように惹きつけることに、教育の真髄を見ている。

もうひと言。私は別に文部科学省の追従者・回し者でも何でもないのだが——そんな語彙を使うことじたい厚かましいか——、河村文科相が『朝日新聞』（9月12日付）朝刊紙上で語った「義務教育改革」が大変気に入ったので取り上げておく。

文科相は、指導要領がこれまでの「先生が教える基準」から「到達目標」にする必要がある、と言われている。「言っている」だけだから実行されるかどうか、多分されないだろうが、「先生が教える基準」と「到達目標」の差は大きい。前者は日々の教える事に一々小うるさい注文が付き、教師がますます萎縮するだけだろうが——私なら窒息死する？——、「到達目標」なら途中の過程は問われないから、教師が自由にやれる、ということだ。

\* そんな幼少時から英語教育をしなくても、例えば



中学1年生の英語の教科書なら容易なものだから、小学4年生からでも百パーセントできると思う。(40頁)  
(……) 小学生、中学生などは日常生活で耳から慣れ、日本語と英語をうまく切り替えてバイリンガルのに話

せるようになるということ。(……) 覚え方も年齢で異なるが、発達段階に応じて身につけるべき英語の質も違うと思う。(47頁)

完

## A View of English Education in Primary School

Osaka Shoin Women's University  
*Hikoichi* HAYASHI

### ABSTRACT

Nearly all the Japanese have learned English at least 6 years or 10 years including college education. But they have seldom been satisfied with their achievements and 'practically useless English' has become a term which the Japanese self-disparagingly have been casting on themselves. Against the backdrop of the situation a new project of teaching English in primary schools has come up and the pros and cons are batted back and forth.

This article, composed on the basis of precise inspection of the debate and taking the side of the project, deals with broader aspects of the whole education as well as the English one.

**Key words:** words as a sound, 'Aufheben' of everyday-life experience, teaching based on 'playfulness', 'not top-down but bottom-up' education, magnetic education